

北京中国社会科学院を訪ねて

— 『日本学刊』2005 1号の紹介をかねて —

研究参与 加藤 幸三郎

1) はじめに

去る3月中旬、わが社研グループの北京訪問に加わり、始めて中国社会科学院や北京日本学研究中心(すでに1999年には、「アジア太平洋の平和と安定」をテーマとする「共同セミナー」を開催している。「月報」No.430参照)を訪問することが出来た。率直に言って、私も今まで社研の北京を始め、上海・香港・深劔・昆明・麗江などを訪問・視察に参加してきたが、今回の「学術報告」を通じての日中交流は、社研の「学術交流」の歴史にとって新しい段階に入ったことを示すといっても過言ではないと思う。

さて、ここでは、昨年11月、旧大友ゼミのOBに連れられ、日中旅行社佐藤ナヲさんのご紹介で、同じ中国社会科学院に属する日本研究所(今回の建国門内大街5号にある中国社会科学院から離れた、同じ東城区張自忠路3号東院の瀟洒な木造建築の中にある。この建物は1924年に段祺瑞政権が北京を制圧した当時そのまま、「北京市文化財」という由緒をもち、「有沢広巳文庫」・「馬場正雄文庫」等も所蔵、同敷地内には「清朝資料センター」や「人民大学跡」の碑などもある)を幸運にも訪問することができ、孫新副所長、高洪政治研究室主任たちと交流ができた経緯にふれてみたいと思う。

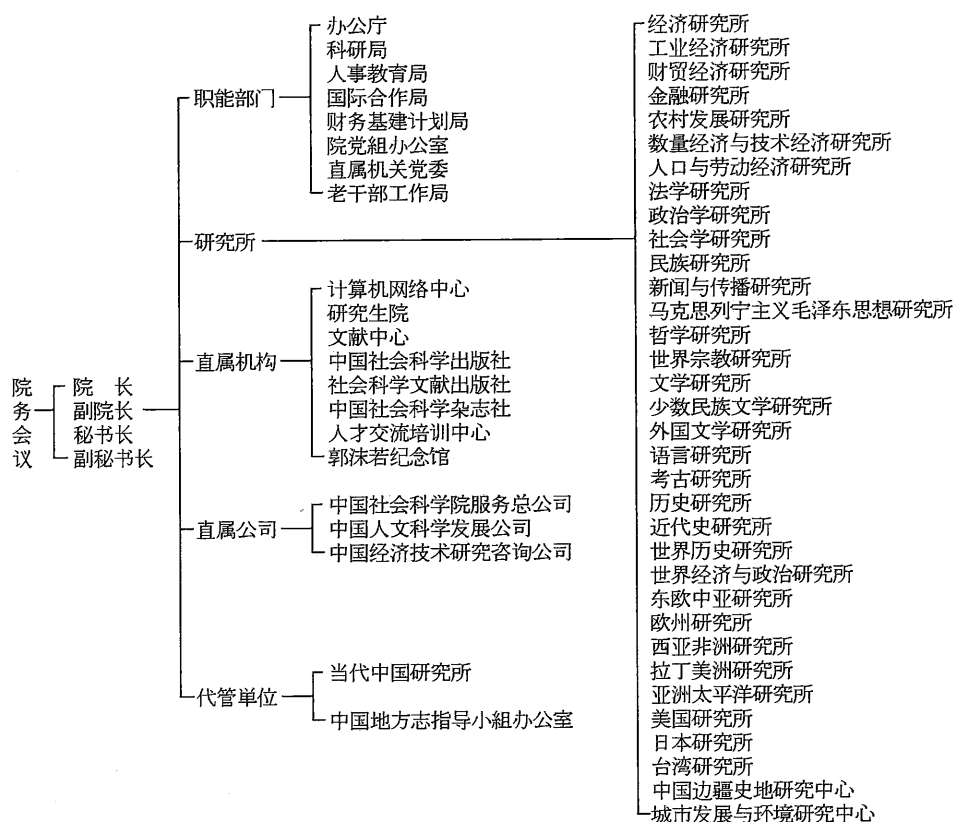


中国社会科学院日本研究所
Institute of Japanese Studies, Chinese Academy of Social Sciences

しかも、初めての交流だったのに、今回の北京出発の前日、高主任は態々北京から拙宅まで電話をかけてこられ、帰国前日の夕方、態々私のために宴席を設けて下さったのである。その折、孫副所長から「お土産」として贈られたのが、この『日本学刊』なのである。

因みに、今回も流暢な日本語で応対して下さったが、孫副所長は立教大学に留学、本学法学部にも所属されたことがある「近代中国政治史」がご専門の野村浩一氏の薫陶・指導をうけられ、「日本の教育制度」がご専門である。高洪主任は中国東北部瀋陽が出身地で「松下政経塾」に留学された経緯をおもちで、前回「挨拶」の折、私が1930年生まれとといったのをうけて、洒落て「昭和30年生まれです」と応答された。

2) 研究組織の歴史的経緯



上の表のように、中国社会科学院は1977年5月に創立されたが、中国科学院の「哲学社会学部」の経済研究所・哲学研究所・世界宗教研究所・考古研究所・歴史研究所・近代史研究所・世界歴史研究所・文学研究所・外国文学研究所・語言{ママ}研究所・法学研究所・民族研究所・世界經濟研究所、情報資料研究室等14の研究單位から構成され、所属研究員は2200人に達し

ていたという。その後 1981 年までに、工業経済研究所・農村発展研究所・財貿経済研究所・新聞研究所（現在、新聞與伝播研究所）・マルクス主義毛沢東思想研究所・社会学研究所・人口研究所・少数民族文学研究所・世界政治研究所（後世界経済研究所と合併して世界経済與政治研究所となる）・美国（アメリカ）研究所・日本研究所・西欧研究所（現在の欧州研究所）などで構成され、中国社会科学雑誌社・中国社会科学出版社等も内部に組織されている。

さらに 1981 年以降、数量與技術経済研究所・文献信息（情報）中心・辺疆史地研究中心・城市發展與環境研究中心・政治学研究所・台湾研究所和亜州太平洋研究所等、現在 31 研究所と 45 研究中心で構成されるに至り、全院で研究者は 4200 余人、高級研究員は 1676 名、中級研究員は 1200 名にも達している（『中国社会科学院概況』）。

「中国社会科学院日本研究所・ホームページ（日本語）」によると、「当研究所では、重点的に現代日本の政治・経済・社会・文化及び対外関係等の分野において研究活動を行い、理論的研究と現実的対策研究を両立させる原則を実行している」といわれ、「中国の日本学研究の展開、中日両国人民の相互理解の増進、中日両国有効関係の促進並びに中国の改革・開放と現代化建設のために寄与しよう」と説明されている。そして日本研究所では、中華日本学会と共同で「総合的学術専門雑誌『日本学刊』」を隔月に刊行しているのである。

3) 『日本学刊 2005 1』の内容と紹介

ところで、お断りしなければならないが、私の不勉強から「中国語」の翻訳は不可能なため、以下の抄訳も私の誤り多き意識であって、読者諸兄姉のご賢察を乞いたい。また、以下普通は「簡化字体」表現だが、私流に日本語表現に変えてある。

本号は、緑色の表紙で、B 5 版、150 ページ、JAPANESE STUDIES と表記、日本学刊雑誌社発行、05 年 1 月 10 日刊（隔月刊、国外発行は中国国際図書貿易公司）。

その内容は、

巻首語	
— 中日関係“脱困”之我見	張進山 (1)
新年專稿	
2004 年日本經濟走勢與前景	江瑞平 (8)
小泉政權在災年中的政治“豊収”	高 洪 (22)
— 2004 年日本政治回顧與展望	
失衡的 2004 年日本外交	劉世竜 (33)
政治	
論日本“後自民党時代”的“自公合作”	徐万勝 (45)
創価学会的社会功能及政治功能	王新生 (59)
— 以高速經濟增長時期為中心	
經濟	
亜洲債券市場發展研究	李 揚 曹紅輝 (74)

亞洲共同貨幣的意義以及日中合作的重要性	[日] 中島厚志 (87)
日本財政介入中小企業信用担保及其效果初析	姚永竜 (94)
<hr/>	
社会	
日本人質危機背後的新聞危機	金 姓 (109)
日本人論的演變軌跡	楊勁松 (125)
— 從文明開化到經濟大國	
跨文化管理的理論與實踐	范作申 (140)
— 從文化角度論日中合資企業經營	
<hr/>	
人物	
小泉改革的總設計師 —— 竹中平藏	余 華 (155)
<hr/>	
書訊	
《日本社会学名著訳叢》面世	(44)
<hr/>	
英文目錄 (Contents)	(160)
<hr/>	

(裏表紙)

JAPANESE STUDIES

No.1, 2005

My Opinion on How to Get Sino – Japanese Relations out Of the Present Difficult Situation.	<i>Zhang Jinshan</i> (1)
Trends of the Japanese Economy in 2004 and Its Future Prospects	<i>Jiang Ruiping</i> (8)
Koizumi Administration's Political "Harvest" in the Year of Diaster	<i>Gao Hong</i> (22)
Unbalanced Japanese Diplomacy in 2004	<i>Liu Shilong</i> (33)
On Japan's "Cooperation between LDP and Cometio" in the "Post LDP Period"	<i>Xu Wansheng</i> (45)
Soka Gakkai's Social and Political Functions	<i>Wang Xinsheng</i> (59)
A Study of the Development of the Bond Market in Asia	<i>Li Yang and Cao Honghui</i> (74)
The Significance of an Asian Common Currency and the Importance of the Cooperation between Japan and China	<i>Nakashima Atsushi</i> (87)
An Analysis of Japan Intervening in Small and Medium Enterprises' Credit Guarantee Financially and Its Effect	<i>Yao Yonglong</i> (94)
The News Crisis behind the Japanese Hostage Crisis	<i>Jin Ying</i> (109)
The Development of the Writings about the Japanese	<i>Yang Jinsong</i> (125)
Theories and Practice of the Cross – cultural Management	<i>Fan Zuoshen</i> (140)

因みに、英文目錄は、以上で終わっている。念のために。

さて、ここで44ページ下段に「埋め草」風に収録されている「日本社会学名著論叢」にふれてみよう。「面生」という意味・使い方が判読できないのであるが、「文面」通りほどの意味であろうか(?)。

この紹介記事は、上記の「北京日本学研究中心」が企画し、周維宏教授が(翻訳?)編集したもので最近「商務印書館」から出版されたという。

この「論叢」は、以下のように10冊から構成されている。

- ①富永 健一著『日本的現代化與社会変遷』
- ②作田 啓一著『価値社会学』
- ③正村 俊之著『秘密和恥辱—日本社会的交流結構』
- ④吉野 耕作著『文化民族主義的 sociology—現代日本自我認同意識的走向』
- ⑤廣田 康生著『移民和城市』
- ⑥江原由美子著『性別支配是一種装置』
- ⑦橘木 俊昭著『日本的貧富差距——從收入與資産並行分析』
- ⑧熊沢 誠著『日本式企業管理的變革與發展』
- ⑨上野千鶴子著『近代家庭的形成和終結』
- ⑩藤井 勝著『家和同族的歴史 sociology』

本学文学部の同僚の方の著作も見え、ご同慶の至りである。

さて、お世話になった中国社会科学院日本研究所高洪政治学研究室主任の収録論文「小泉政権在災年中的政治“豊収”——2004年日本政治回顧與展望」の概略をみてみたい。

まず「内容提要」(要約?)をみると、2004年の日本政治は、依然(経済)大国化の途を継続して走っている。保守政治は、“豊収“を続ける一方、自然災害・社会災害”が頻発して”災年“ともいえる状況が生まれ、極めて対照的である。「一国平和主義」を放棄して、まさにこれから日本はどの方向に向かって行くのであろうか。新保守政党(民主党)との権力争いの前触れの行方は如何。2004年の日本政治を回顧して、次表のような問題から、如何な回答が出てくるのであろうか。

過去十年日本国民(公衆)選出の“代表性漢字”と其政治意識

年份	漢字	主要含文	公衆選抜該漢字的社會政治理由
1995	震	阪神地震	当年發生了阪神大地震、金融機構大面積震動後崩壞
1996	食	食品中毒	〇ー157食物中毒事件、多起吞食福利稅款的政治醜聞
1997	倒	企業倒産	景氣持續低迷到使山一證券等超大企業倒閉
1998	毒	投毒事件	“和歌山カレーライス投毒事件”及其審理造成敵社會影響
1999	末	世紀末尾	頻發“警察組織汚職”與迷漫汗社會的世紀末危機感
2000	金	金金會談	金大中與金正日實現和談、發行新貨幣
2001	戦	反恐戦争	“九一一”事件後的反恐戦争、国内企業界同不景氣的慶戰
2002	帰	人質帰国	被朝鮮拉致(綁架)的人質回到日本、由此引發日朝外交摩擦
2003	虎	虎狼咆哮 如踏虎尾	衆議院選挙引入政策公示程序“候(公?)選人開始”政策 虎哮“派自衛隊到イラク、面臨檢境被譏瀆為”采老虎的尾巴
2004	災	天災人禍	核電站泄露(漏洩?)、殺害兒童事件以及人質被殺等災難頻發

以上、轉變の激しい日本で生活している所為か、すでに私たちの記憶から遠くなってしまった事実もあるが、中国側からみて巧に政治的な社会現象を把握しているように思う。

この他にも、昨年度通常国会期間における小泉政権の政治結果や参議院選挙による「改選結果」をはじめ「各党派得票変化表」ならびに「経済同友会による主要政党口約にたいする評価」など、周知のデータをも掲載していることも指摘しておかなければならない。

去る4月16日の発表された「衆議院憲法調査会最終報告書」は今後いろいろな意味で論議を呼ぶこととおもわれるが、そのことについても、この高論文はきちんと予想的に触れていることも記しておこう。イラク戦争を始めとする「新聞報道」や「日本論」といった将に日本の将来にかかわる重要問題の論考とならんで、「竹中平蔵論—小泉改革の総設計師(生い立ち・経歴・著作なども含め)」というのも、まさに「小泉改革の鍵」を握る「郵政民営化問題」が行き詰まり状況にある現在、興味ある「人物論」となっているといえよう。

最後に、今回は本学の留学生諸兄弟たちの献身的な援助で、無事「学术交流」のための北京訪問が成功裡に終わったことに深い謝意を捧げて結びとしたい。

〔付記〕 去る11月の日本研究所訪問の折、所内食堂での懇談にも同席された孫伶伶さん(法学博士、日本政治研究室助理研究員)が、『赤旗』(本年5月31日の“海外の目”)誌上でインタビューに応じて、日本での「九条の会」の動向や歴史的意義についての確かな判断と日本国民への激励を惜しまれなかった。早速御礼のメールを送ったら、「日本語が下手なので」英文の御礼のメールが送られてきた。